

講演者:

村上 隆 氏 (京都美術工芸大学)

略歴:

1953 年京都生。

京都大学工学部、同大学院工学研究科修了。

東京藝術大学大学院美術研究科修了。

学術博士。

2014 年 4 月から現職。京都国立博物館学芸部長、奈良文化財研究所上席研究員を歴
任。2012 年 4 月から、高岡市美術館館長、他に石見銀山資料館名誉館長などを兼任。
奈良国立文化財研究所時代から、材料科学の見地から、金属を中心に古代から現代
に至る材料と技術の歴史を追及してきた。

専門は、歴史材料科学、文化財学、博物館学。

著書に、『金・銀・銅の日本史』(岩波新書)、『金工技術』(至文堂)、『美を伝える』(監
修・執筆: 京都新聞出版センター)、『色彩から歴史を読む』(監修・執筆: ダイヤモンド
社)、『現在知 日本とは何か』(共著: NHK ブックス)、他多数。

第 8 回ロレアル国際賞「色の科学と芸術賞金賞」、第 1 回「石見銀山文化賞」ほか。

講演タイトル:

「工学と芸術の融合」

講演概要:

工学の究極は、効率化と機能性、そして再現性にあるだろう。一方、芸術の究極は、あ
らゆる制約から解放され、あくまでも作者の美の追求であり、手作りの産物である。しか
し、どちらも「もの」を作りだすことが基本にある。ものを作るには、まず材料が必要であ
る。さらに目的の形を作り上げる技術が伴わないといけない。これは、「ものづくり」の原
点である。工学と芸術。一見全く異なるジャンルに見えるが、「ものづくり」を通してリンク
する。私は、材料科学の立場から、古代から現代に至る「ものづくり」を解析し、工学と芸
術の境界を探ってきた。そして、いつも感動を覚えるのは、マクロで美しいものは、ミクロ
でも美しいという、物質が根源的に持つ美の世界である。ここに、工学と芸術が根幹で
繋がっている姿をみることができるだろう。